新見公立大学紀要　第31巻
pp. 51-60, 2010

研究ノート

保健師学生の公衆衛生看護研究指導に関する指導方法の評価

福岡　悦子*・金山　時恵・矢庭さゆり

新見公立短期大学地域看護学専攻科

（2010年11月17日受理）

Ａ短期大学地域看護学専攻科全修了生94名を対象に，公衆衛生看護研究指導に対する教員の指導のあり方や，学生自身の取り組みを評価し，今後の研究指導に役立てるために自己記入式アンケート調査を実施した。研究のテーマ決定時に困ったことは，「見当がつかなかった」「イメージがつかめなかった」「不安であった」が多かった。教員の研究指導は，「研究指導の機会」「研究指導の求めやすさ」ともに66.7％の者が肯定的であった。研究に必要な技術や方法の指導の満足度では，「SPSS の操作方法」が74.5％と最も高かった。研究の段階ごとにみた研究指導の満足度は概ね75～76％と高かった。しかし，学生自身の研究プロセスでの理解度は「文献検索」「パワーポイント作成」の約75％と比較し，「SPSS の操作方法」は52.9％と最も低かった。今後は SPSSを研究の早い時期に導入すること，研究目的や研究背景を大切に研究指導に取り組む必要がある。
（キーワード）保健師学生，公衆衛生看護研究，研究指導，SPSS 操作

はじめに

Ａ短期大学地域看護学専攻科（以下，専攻科とする。）は2004年（平成16年）４月，１年課程の保健師養成コースとして開設された。開設当初は28科目33単位で構成されていた。2009年（平成21年）度からカリキュラムの改正に伴い，教養２科目，専門基礎８科目10単位（２単位増加），専門15科目18単位，選択１科目１単位，地域看護学演習１単位（新規），臨地実習２科目４単位，合計29科目36単位で構成されている。

専攻科が開設されて６年経過し，研究指導等について学生はどのように捉えているのかを確認し，今後の研究指導の参考にしようと考えた。契機は，2008年（平成20年）11月８日，第３期修了生から研究について入学当初は大変不安であったというコメントが届いたことである。学生の要望に応えるため，2009年度の入学生からできる範囲，たとえば研究の始めに修了生の論文を配布し，参考にするなどの卒業研究指導（以下，研究指導とする。）の改善に取り組んだ。

卒業研究における学生個人に対する研究への取り組みや満足度，教員の研究指導のあり方について明かにし，次年度からの研究指導に役立てるために2010年（平成22年）３月，６期生の修了時に修了生全員に自己記入式アンケート調査を実施した。先行研究では，教員の研究指導に対する評価に関する論文はみられなかったため，独自に調査表を作成した。

Ⅰ．研究目的

卒業研究における学生個人に対する研究への取り組みや満足度，教員の研究指導のあり方について明かにし，次年度からの研究指導に役立てる。

Ⅱ．公衆衛生看護研究の概要

１．専門科目，通年２単位60時間（必修）。授業計画５回。
２．授業目的
公衆衛生看護における研究課題と技法について実践的に理解する。実習等の実践活動事例を通して，地域で生活している様々な健康レベルにある個人とその家族を対象に，保健活動における保健師の機能，役割等を研究的に考察し，自己の地域看護観を深めるとともに，専門職業人として必要な研究活動の基盤をつくる。
３．授業計画（表１）
４．研究のスケジュール表
表２に研究のスケジュール表を示す。

Ⅲ．研究方法

１．調査対象：Ａ短期大学地域看護学専攻科修了生2004年度（１期生）から2009年度（６期生）までの94名。
２．調査方法：
2010年３月に６期生には修了式当日に自己記入式アンケ

*連絡先：福岡悦子　地域看護学専攻科　新見公立短期大学　718-8585　新見市西方1263-2

表１　授業計画

第１回：公衆衛生看護研究の動向と意義，方法，プロセス
第２回：公衆衛生看護研究の動向と意義，方法，プロセス
第３回：論文作成の方法と文献学習
第４回：研究計画書作成と研究論文作成
第５回：中間発表会における研究計画の発表（１日）

研究発表会における研究結果の発表（１日）
＊詳細については別途説明を行う。

表２　卒業研究のプロセス（案）

	時　　期	内　　容	備　　考
1	入学当初	テーマの選定	エクセルの個人指導
			（必要ならば）
2	５月10日（月）	テーマの決定および研究計画書の作成	
		参考文献の収集	できるだけ早く
3	５月から６月初旬	調査票の作成	
		研究計画書完成	
4	６月末	調査票の完成，調査依頼文作成等	
5	６月末から７月下旬	調査票配布（出身学校等の場合）	
		調査票配布（その他の場合）	
6	夏休みまでに	調査票回収，データ入力，分析，単純集計 χ^2検定	
		結果を全て記入すること	
7	夏休み中	論文作成	
8	９月下旬	考察に突入し，論文完成を目指す	
9	11月４日（木）	中間発表会	
10	11月22日（月）	論文完成，締め切り	
		グループ内で論文読み合わせを行い，修正する	
11	12月16日（木）	研究発表会	

ート調査表を直接手渡した。１～５期修了生には調査の依頼と調査表を同封して郵送し，返信用封筒を入れて回答を依頼した。

３．調査期間：2010年３月18日から４月30日

４．調査項目：

１）属性

２）入学後テーマ決定で困ったこと

３）教員の研究指導について

⑴　研究指導の機会，研究指導の求めやすさ，（Ａ：定期的・計画的に実施してもらえた４点，ややＡに近いを３点とした。Ｂ：教員が忙しく，十分に指導してもらえなかった１点，ややＢに近かったを２点とした。）

⑵　研究に必要な技術や方法の指導の満足度（文献検索の方法，SPSS の操作方法，パワーポイントの作成方法）

⑶　研究の段階ごとにみた場合の研究指導の満足度（テーマ決定・研究計画書作成の段階，調査実施・分析の段階，論文作成の段階，発表会準備の段階）

⑷　教員の指導で印象に残った言葉の有無（得点化なし）

４）学生自身について

⑴　研究のプロセスでの理解度（文献検索の方法，SPSS の操作方法，パワーポイントの作成方法）

⑵　研究の段階ごとにみた場合の理解度（テーマ決定・研究計画書作成の段階，調査実施・分析の段階，論文作成の段階，発表会準備の段階）

⑶　研究への取り組みの振り返り

取り組み姿勢，研究を終えた後の達成感

以上を４件法により，満足度を問うものは，「満足できた」（４点），「まあまあ満足できた」（３点），「やや不満であった」（２点），「不満であった」（１点）とした。理解度を問うものは，「理解できた」（４点），「まあまあ理解できた」（３点），「やや理解できなかった」（２点），「理解できなかった」（１点）として得点化した。

⑷　研究終了後，研究への興味

「大変わいてきた」（５点），「少しわいてきた」（４

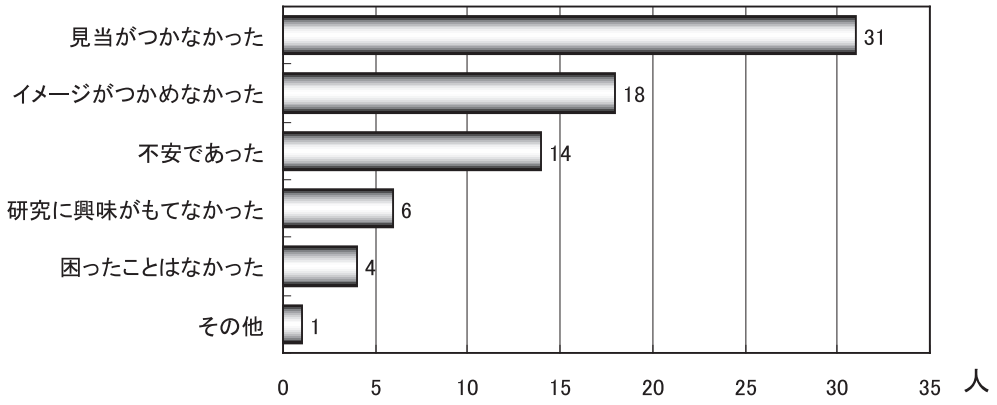

図１　テーマ決定時に困ったこと

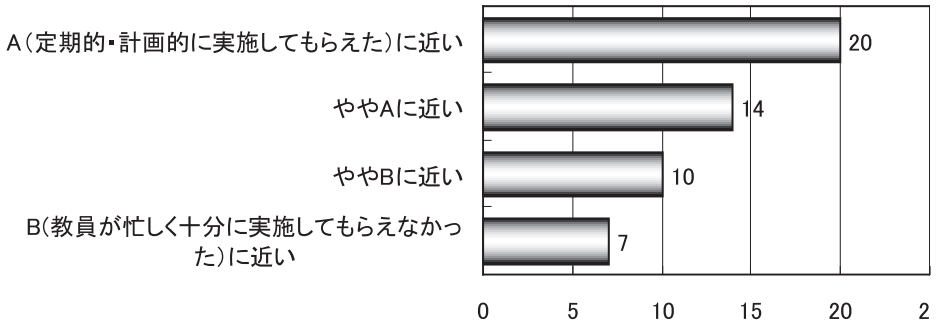

図２　研究指導の機会

点），「どちらでもない」（３点），「あまりわいてこない」（２点），「全くわかない」（１点）とした。

⑸　専攻科修了後，研究への取り組みの実際

⑹　卒業研究の現場での役立ち

５）今後の学生のために研究指導で望むこと

６）学生同士やゼミで学べたこと

７）研究や研究指導に対する自由記述。

５．解析方法

単純集計，クロス集計，χ^2検定を行った。

統計解析にはSPSS for Windows ver13.0J を使用し，有意水準はp値＜0.05とした。

６．倫理的配慮

本研究の趣旨及び記載内容は本研究以外に使用しないこと，研究への協力は自由意思によること，研究に協力しないことで不利益を被ることはないことを文書で説明し，アンケート調査の回答をもって同意が得られたものとした。

Ⅳ．結果

調査表配布数94名，回収数51名，回収率54.3%。

１．対象者の概要

１）修了期

１期生２名（3.9%），２期生５名（9.8%），３期生10名（19.6%），４期生９名（17.6%），５期生12名（23.5%），６期生13名（25.5%）であった。

２）専攻科入学までの最終学校

短期大学27名（52.9%），専門学校16名（31.4%），５年一貫校７名（13.7%），その他１名（2.0%）であった。

３）性別

男性２名（3.9%），女性49名（96.1%）であった。

４）専攻科入学前までの研究への取り組み

46名（90.2%）の学生が何らかの研究の経験があり，内訳は，事例研究23名，文献研究７名，アンケート調査12名，質的研究４名，その他２名であった。

５）テーマを決めるのに困ったこと（複数回答可）

図１のとおり，見当がつかなかった（31名），イメージがつかめなかった（18名）の項目が多かった。

２．教員の研究指導について

１）研究指導の機会

図２のとおり，A（定期的・計画的に実施してもらえた）に近い20名（39.2%）と，ややAに近い14名（27.5%）が多かった。しかし，B（教員が忙しく十分に実施してもらえなかった）７名（13.7%），ややBに近い10名（19.6%）もみられた。

２）あなたの（学生自身）の研究指導の求めやすさ

図３のとおり，Aに近い17名（33.3%）と，ややA

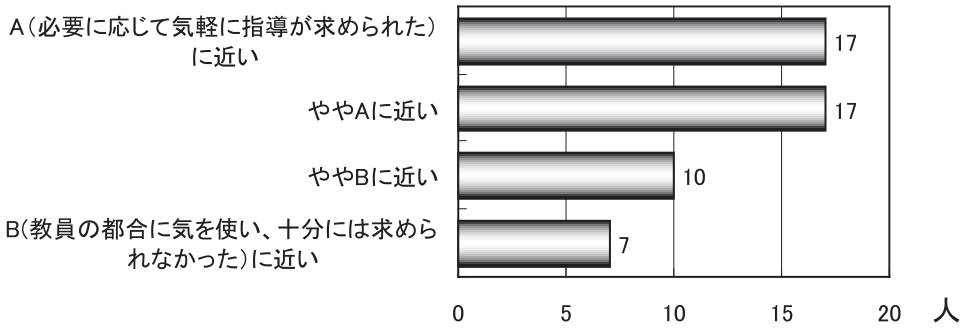

図３　研究指導の求めやすさ

表３　研究に必要な技術や方法の指導の満足度

		n	%
文献検索	満足できた	6	11.8
	まあまあ満足できた	33	64.6
	やや不満であった	11	21.6
	不満であった	1	2.0
SPSS 操作方法	満足できた	5	9.8
	まあまあ満足できた	33	64.7
	やや不満であった	12	23.5
	不満であった	1	2.0
パワーポイント作成	満足できた	11	21.6
	まあまあ満足できた	27	53.0
	やや不満であった	9	17.6
	不満であった	4	7.8

に近い17名（33.3%）が多かった。しかし，Ｂに近い７名（13.7%），ややＢに近い10名（19.6%）もみられた。

３）研究に必要な技術や方法の指導の満足度（表３）

表３の通り，いずれの項目も満足できた，まあまあ満足できたが74%から76%を占めていた。

４）研究の段階ごとにみた場合の研究指導の満足度（表４）

表４の通り，いずれの項目も満足できた，まあまあ満足できたが74%から76%を占めていた。

５）教員からの研究指導のなかで印象に残っている発言の有無

あると回答した者26名（56.5%），無いと回答した者20名（43.5%）であった。内容は,「研究がだんだんよくなっている」「よい論文になってきた」など研究に対する頑張りを褒めてもらえた発言が多かった。その他として,「参考にしたら」と文献を提供してくれたことなどの記述がみられた。

３．学生自身の研究の取り組み方について

１）学生自身の研究プロセスでの理解度（表５）

表５のとおり，文献検索，パワーポイント作成の項目では，理解できた，まあ理解できたが74.5%であった。しかし，SPSS の操作方法については，理解できた，まあまあ理解できたと回答した学生は53.2%と低かった。

２）研究の段階ごとにみた場合の学生自身の理解度（表６）

研究の段階ごとにみた場合の学生自身の理解度は表６のとおり，調査実施分析の64%がもっとも低かったが，その他はいずれも72%から76%が理解できた，まあまあ理解できたと回答していた。

４．学生自身の研究への取り組みの振り返り（表７）

１）学生自身の研究への取り組みの振り返りは表７のとおりである。

研究の成果，研究終了後の達成感は80.0%を超えていた。しかし，研究の取り組み姿勢は68.6%と低く，研究終了後研究への興味は50.9%ともっとも低かった。

２）専攻科修了後，研究の取り組みの実際

研究に取り組んだと答えた者が15名（39.5%），ないと答えた者が23名（60.5%）であった。取り組んだと答えた理由は，上司に進められた９名，自分から積極的に３名，その他６名であった。その他の内容は，看護師３年目で看護研究は必須,虐待事例を遡ったとき，リスク要因が捉えられていたか疑問に思った，興味のある内容であった，業務命令，症例研究，病棟の看護研究との記述がみられた。

表 4　研究の段階ごとにみた場合の教員の研究指導の満足度

		n	%
テーマ決定 研究計画書作成	満足できた	15	30.0
	まあまあ満足できた	23	46.0
	やや不満であった	9	18.0
	不満であった	3	6.0
調査実施・分析	満足できた	13	25.5
	まあまあ満足できた	26	51.0
	やや不満であった	9	17.6
	不満であった	3	5.9
論文作成	満足できた	16	31.4
	まあまあ満足できた	22	43.1
	やや不満であった	10	19.6
	不満であった	3	5.9
発表会準備	満足できた	11	21.6
	まあまあ満足できた	27	52.9
	やや不満であった	12	23.5
	不満であった	1	2.0

表 5　学生自身の研究プロセスでの理解度

		n	%
文献検索	理解できた	11	21.6
	まあまあ理解できた	27	52.9
	やや理解できなかった	11	21.6
	理解できなかった	2	3.9
SPSS 操作方法	理解できた	5	9.8
	まあまあ理解できた	22	43.1
	やや理解できなかった	21	41.2
	理解できなかった	3	5.9
パワーポイント作成	理解できた	20	39.3
	まあまあ理解できた	18	35.3
	やや理解できなかった	9	17.6
	理解できなかった	4	7.8

表 6　研究の段階ごとにみた場合の学生自身の理解度

		n	%
テーマ決定 研究計画書作成	理解できた	10	20.0
	まあまあ理解できた	26	52.0
	やや理解できなかった	13	26.0
	理解できなかった	1	2.0
調査実施分析	理解できた	5	10.0
	まあまあ理解できた	27	54.0
	やや理解できなかった	17	34.0
	理解できなかった	1	2.0
論文作成	理解できた	11	22.0
	まあまあ理解できた	27	54.0
	やや理解できなかった	9	18.0
	理解できなかった	3	6.0
発表会準備	理解できた	14	28.0
	まあまあ理解できた	22	44.0
	やや理解できなかった	12	24.0
	理解できなかった	2	4.0

表７　学生自身の研究への取り組みの振り返り

		n	%
研究への取り組み姿勢	満足であった	6	11.8
	まあまあ満足であった	29	56.8
	やや不満足であった	13	25.5
	不満足であった	3	5.9
研究の成果	満足であった	5	9.8
	まあまあ満足であった	31	60.8
	やや不満足であった	13	25.5
	不満足であった	2	3.9
研究終了後の達成感	満足であった	20	40.0
	まあまあ満足であった	21	42.0
	やや不満足であった	5	10.0
	不満足であった	4	8.0
研究終了後研究への興味	満足できた	5	9.8
	まあまあ満足できた	21	41.1
	やや不満であった	16	31.4
	不満であった	8	15.7
	全くわからない	1	2.0

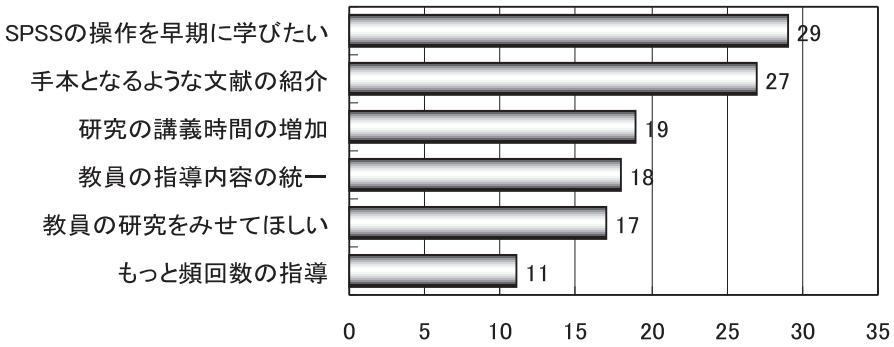

図４　今後の研究指導への希望

５．今後の学生のために望む研究指導

複数回答であるが図４のとおり，SPSS の操作方法を早期に学びたい（29名），手本となるような文献の紹介（27名）が多かった。続いて，研究の講義時間の増加（19名），教員の指導内容が異なることがあるので統一してほしい（18名），教員の研究を見せてほしい（17名），もっと頻回にみてほしい（11名）となっていた。

６．研究指導の機会・研究指導の求めやすさと学生の満足度及び理解度の比較

研究指導の機会及び研究指導の求めやすさと各段階における学生の満足度を χ^2 検定した。研究指導の機会と研究に必要な技術や方法の指導の満足度（文献検索，SPSS の操作方法，パワーポイント作成方法）では，研究指導は定期的・計画的に実施してもらえたと回答した者とは，全て有意な関連がみられた。同様に，研究の段階ごとにみた場合の研究指導の満足度（テーマ決定・研究計画書作成の段階，調査実施・分析の段階，論文作成の段階，発表会準備の段階）と研究指導は，定期的・計画的に実施してもらえたと回答した者とは，全てに有意な関連がみられた。研究の求めやすさにおいても同様に全ての項目に有意な関連がみられた。

次に，満足できた，まあまあ満足できたを「満足群」，やや不満であった，不満であったを「不満足群」とし，理解度については，理解できた，まあまあ理解できたを「理解群」，やや理解できなかった，理解できなかったを「理解なし群」として再度 χ^2 検定した結果を表８に示す。

SPSS の操作方法，テーマ決定・研究計画書の段階，調査実施分析の段階以外で「満足群」が有意に高かった。研究指導の求めやすさでは，全ての項目で「満足群」が有意に高かった。

７．教員の研究指導，学生自身の研究の取り組み方の評価（得点）

研究指導の機会，研究指導の求めやすさ，研究に必要な技術や方法の満足度，研究の段階ごとにみた場合の研究指導の満足度，学生自身の研究のプロセスでの理解度，研究への取り組みの振り返りについて，それぞれの得点から総

表８　研究指導の機会・研究指導の求めやすさ等のχ^2検定結果

		研究指導の機会	研究指導の求めやすさ
研究に必要な技術や方法の指導	文献検索	$p=0.001$	$p=0.000$
	SPSS の操作方法	$p=0.270$　n．s	$p=0.001$
	パワーポイント	$p=0.000$	$p=0.000$
研究の段階ごとにみた場合，研究指導の満足度	テーマ決定・研究計画書の段階	$p=0.180$　n．s	$p=0.001$
	調査実施・分析の段階	$p=0.086$　n．s	$p=0.000$
	論文作成の段階	$p=0.000$	$p=0.001$
	発表会準備の段階	$p=0.018$	$p=0.000$

表９　入学期別学生の評価

	度　数	平均値	標準偏差	最小値	最大値
１～２期生	7	57.9	8.1	43	64
３～４期生	18	54.9	15.3	25	75
５～６期生	23	61.9	10.0	37	81

得点を算出し，専攻科入学前の学歴と比較した。短期大学卒（以下短大とする）の平均点は57.7±12.8点，専門学校卒60.3±11.5点，５年一貫校卒56.6±12.7点であった。学生の学歴を①短大と専門学校他②短大及び専門学校と５年一貫教育校に分類して平均値を比較した。いずれも有意な差はみられなかった。

８．入学期別にみた教員の研究指導の機会，学生自身の研究の取り組み方の評価（得点）

これまで１期～６期生が修了している。この６期を２期ごとに分類（３群）して得点の平均値を比較したものを表９に示す。一元配置分散分析の結果，有意な関連はみられなかったが，５～６期生の得点が高い傾向であった。

研究指導の機会，研究指導の求めやすさに限ってみたが，いずれも有意な関連はみられなかった。

Ⅴ．考察

今回これまでの地域看護学専攻科修了生全員にアンケート調査を実施した。１期生は2005年３月に修了している。回答者の修了期をみると１期生２名（3.9%），２期生５名（9.8%）と回答率が非常に低い。理由として考えられることは，昔のことなのでよく覚えていない，思い出すのが面倒なので回答するのが億劫だといった情報バイアスがある。また，教員の学生指導に関する先行研究はある程度[1)-6)]みられるが，教員自身の研究指導の評価に関する先行研究は見当たらなかったので，結果に基づいて考察する。

１．テーマを決めるのに困ったこと

「何にしたらよいか見当がつかなかった」が31名ともっとも多くなっている。回答者の52.9%は短大卒である。学歴別にみたところ，短大卒66.6%，専門学校卒56.6%，５年一貫校卒42.9%が「何にしたらよいか見当がつかなかった」と回答している。検定をしていないが，看護研究の経験の有無にかかわらずテーマ決定は困難であると思われる。「イメージがつかめなかった」18名，「不安であった」14名，「研究に興味が持てなかった」という回答もみられている。

公衆衛生看護研究は「必須」２単位であることから，2010年度入学生（７期生）からは，合格通知発送時に入学後の研究テーマについてあらかじめ考えておくようにとの文書を同封している。入学時のオリエンテーション，研究テーマについての学生の話し合いなどを通して学生はだんだんと研究テーマを絞っていき，５月の連休明け頃にはほとんどの学生が決めている。

テーマを決定するために，どのような点を考慮する必要があるのか？例えば，これまでの研究を継続するのか，看護師として勤務していた時に気になっていた事があるのか，最近の動向で明らかにしたいことがあるのかなど，もう少し学生と議論を深める必要もあるかもしれない。また，本学の教育は学生に考えさせることを大切にしており，学生主体ではあるが，教員も学生が楽しみながら研究ができるにはどうすればよいかという視点を忘れてはならないと考える。

１．教員の研究指導について

１）研究指導の機会

34名（66.7%）のうち17名がＡ（定期的・計画的に実施してもらえた）に近い，および17名がＡに近かったと回答していたが，17名（33.4%）はＢ（教員が忙しく，十分に実施してもらえなかった）に近い，およびややＢに近かったと答えている。

調査時，３名の専任教員のこれまでの研究指導を振り返った時，１期生～２期生（専攻科開設当時）は教員の出張などのスケジュールを早めに学生に伝えられていなかったこと，さらに現場から教員になった２名は教育，研究に慣れていなかったこともあり，定期的・計画的に実施してもらえなかったと回答したものが多

いと予測していた。

３期生～４期生以降は，早めにゼミの時間の周知を図ったり，回数を増やしたり，ゼミの仲間で査読をするなどの改善に取り組んできたが，一部分不十分な面があったと反省している。５期生～６期生である一昨年あたりから早めにゼミの日程を学生主体で決め，きめ細かい指導ができるよう心がけ，実施している。

６期生までを２年ごとに分類して検定をしたところ有意な関連はみられていないが、５～６期生の研究に対する評価の平均点が高い傾向から、これまでの専任教員の指導はそれなりの効果があったものと推察される。１年間の養成期間の割にカリキュラムが大変多いため，学生が教員に求める研究指導の機会についてはやや遠慮があることも考えられる。

２）研究指導の求めやすさ

34名（66.7%）のうち20名がA（必要に応じて，気軽に指導が求められた）および14名がAに近かったと回答していたが，17名（33.4%）はB（教員の都合に気を使い，十分には求められなかった）およびややBに近かったと答えている。研究指導の機会とおおむね同一の結果である。研究が苦手であり，研究が進んでいなければ，研究の求めやすさは当然悪くなることが予想される。これまで通り，教員は常に学生の様子を気にかけながら，研究が進んでいないと思われる学生には声掛けをし，研究しやすい環境つくりに努めることも重要である。

舟島[7]らによると，看護教員を対象とした２件の研究[8)-9)]では，わが国の看護教員が研究を実施したり，研究成果を活用することに関しては十分に行えていないと自己評価していることを明らかにしていたと述べている。本専攻科においても十分とはいえないが，教員はできる範囲で時間を捻出し，学生の研究には力を注いでいる。約70%近くの学生が研究の求めやすさを肯定していたことは，教員の思いが通じていたものと思われる。

３）研究指導の満足度

いずれの項目も74%から76%と多くの学生の満足度は高いといえる。しかし，約３分の１の学生はやや不満足であった，不満足であったと回答している。このことは反省しなければならない。教員には学生の研究だから，当然学生は研究に主体的に取り組むべきとの考えがある。建前はそうであったとしても，学生もさまざまであることから，各学生にあった研究指導がさらに必要となると思われる。

２．学生自身の研究の取り組み方について

１）学生自身の研究プロセスでの理解度

やはり，SPSSの操作方法の理解度がもっとも低く53.2%であった。各教員のゼミ生で振り返った時，毎年このことが課題に挙がり，部外の非常勤講師に，疫学演習の講義の中でできるだけ早い時期にSPSSの操作方法の指導を依頼してきた。しかし，実際には早い時期でのSPSS操作方法の導入へとつながっていない。そこで，筆者のうちの１名は，６期生に限るが，夏季休暇直前，各学生のデータをもとに単純集計までできるよう数回の指導に当たった。SPSSの理解度については，学生になぜこのソフトを使うのか，何のためにこのソフトを使うのか，このソフトを使うことでどんなメリットがあるのか等について，専任教員自身が十分に指導できていなかったことも理解度が低い原因の一部分と思われる。

２）研究の段階ごとにみた場合の学生自身の理解度

テーマ決定・研究計画書作成，論文作成，発表会準備等，調査実施・分析は72%から76%であったが，調査実施分析の理解度が64%と低かった。前の項と同様，学生にとって分析は非常に難しいと捉えていることがわかる。SPSSを使用すれば瞬時に結果は出るが，それは何を意味しているのか，その意味を理解することは難しいことである。SPSSの示す結果の意味を学生とともに考えることもある。

一方，論文作成の理解度が低いのではないかと考えていたが，予想と異なっている。最初論文作成で困っていた学生も，ゼミの仲間での頻回の検討で，自分では気づかなかった視点での意見が出ることにより，だんだん論文作成に引き込まれるものと思われる。また，終盤になるとゼミの学生同士が査読者となり，ますます論文の内容が良くなっていくことを，学生自身が経験している。仲間のありがたさを素直に受け入れていくようである。

３）研究への取り組みの振り返り

取り組み姿勢の満足度が56.8%ともっとも低く，逆に研究終了後の達成感は82%ともっとも高かった。取り組み姿勢の自己評価がもともと低かったのか，あるいは，公衆衛生看護研究は昔のことであり，適当な回答をした学生もいたのかもしれない。しかし，多くの学生は高い達成感を味わっていたことが伝わってくる。研究は学生時代だからこそ時間をかけて取り組めるものであり，本学での研究はいずれの分野に就職しても役立つということを常に伝え続けている。

４）今後の学生のために望む研究指導

もっとも多い希望は，SPSSを早期に学びたい（29名），手本となるような文献の紹介（27名）である。2010年度から疫学・疫学演習担当教員が部外非常勤講師から，本学採用の教員と交代した。担当教員の交代により学生は，早い時期にSPSSを学ぶことができているので，この点は改善している。次に，手本となるような文献の紹介は，もっともな意見であるとも言えるが，自分のしたい研究の先行文献を探す作業は学生の力をつけることにつながる。したがって，安易に学生の意見を聞くことが良いとは言い切れない現状であ

る。もっと頻回な指導をという意見に対しては，最近はかなり改善されたものと考えている。

藤井ら[10]は，研究目的の焦点化に重点をおいた研修は,研究の質を高める上で有効であると報告している。黒田[11]は研究の価値は，研究背景により決まるほど重要な部分であると述べている。研究の背景とは，研究テーマ周辺を取り囲んでいる多様な状況を指し，それを研究計画書の段階で可能な限り明らかにしておく必要がある。そのためには，とにかくテーマ周辺の文献を読みこなす必要があるとのことである。また，梶井ら[12]は，先行研究でどのようなことがどの程度明らかになっているか具体的に記載されているかを計画書の段階で評価する必要があると述べている。藤井は病院看護師を対象にした研究であるので，学生に直ちに実施はできないものの，これらのことを参考に次年度からは研究テーマの決定，研究背景および，研究計画書の段階での評価を大切に学生の目線で研究指導に取り組みたい。

Ⅵ．研究の限界

今回の調査は，Ａ県内の小規模な大学のなかでさらに小さな学科での調査である。しかも対象数が94名と少ない。そのうえ，先行研究でも，公衆衛生看護研究の教員に対する評価はほとんどみられず，比較もできなかった。したがって，一般化はできないと考える。しかし，筆者らにとっては今後の課題がみえ，今年度の入学生から新たな方法を導入している。

文献

1）横井和美，西川みゆき，松本行弘，他：大学と地域が連携した臨床看護研究のサポート育成に対する試み，臨床看護研究サポートのスキルアップ研修の評価，人間看護学研究；６，63-70，2008

2）堺俊明，垣之内静子，宮武明ら：看護研究による看護師の質の向上を目指して，藍野学院紀要19，109-114，2006

3）古城幸子，木下香織，栗本一美，他：３年過程看護学生の「看護研究」への取り組みと教育評価　本学の2000年から2004年の５年間の分析．新見公立短期大学紀要26，51-60，2005

4）梶井睦美，古田暉美子，横山美奈子：Ｎ総合病院における看護研究指導の評価，過去２年間の研究計画書と論文の評価，日本看護学会論文集，看護管理，36：184-186，2005

5）井瀧千恵子，宮川純子，小笠原典子ら：北海道看護協会学会委員会活動の一評価・・看護研究指導に関する調査．日本看護学会論文集，看護管理，34：428-430，2003

6）小倉真奈美，草刈淳子，長友みゆき：臨地実習指導者の指導内容に関する研究：日本看護研究学会誌21（3），167，1998

7）舟島なおみ，定廣和香子，松田安弘：看護学教員のロールモデル行動に関する研究 ― 教員の特性と教員自身が評価したロールモデル行動の質との関係 ―，千葉大学看護学部紀要（25），17-25，2003

8）小川妙子，舟島なおみ，杉森みどりら：看護学実習における教授活動に関する研究 ― 教員特性と教授活動の関係に焦点を当てて ―，看護教育学研究５（1），22-40，1996

9）亀岡智美，廣田登志子，松田安弘ら：看護専門学校に所属する教員の役割遂行の現状.日本看護学教育学会誌，10（2），195，2000

10）藤井加芳子ら：看護研究論文の質に影響する要因．第29回日本看護学会論文集（看護管理），232-234，1998

11）黒田裕子：看護研究 Step by step．学研．31，1998

12）前掲書６）186

＊　注意書き：５年一貫教育とは

平成９年３月，文部省「高等学校における看護教育の充実・振興に関する調査研究会議」の報告等を受けて，平成11年12月に「保健婦助産婦看護婦学校養成所指定規則」の一部が改正され，従来までの衛生看護科に２年間の専攻科を加えた５年間の一貫した教育による看護師養成課程を設けることができるようになり，平成14年４月から５年一貫教育[1]が開始された。

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/12/__icsFiles/afieldfile/2009/03/31/1216918_001_2.01_2.pdf#search=‘看護教育５年一貫教育’2010．９.26アクセス

Evaluation of teaching methods in public health nursing research supervision of public health nursing students

Etsuko FUKUOKA, Tokie KANAYAMA, Sayuri YANIWA

Niimi College, 1263–2 Nishigata, Niimi, Okayama, Japan

Summary

Including all 94 graduates of a community health nursing course at A Junior College as subjects, the nature of instructor guidance in public health nursing research supervision and the approaches taken by the students themselves were evaluated, and in order to make this useful for future research supervision, a self-completed questionnaire survey was carried out. Among the difficulties encountered when deciding upon a theme for research, “nothing came to mind”, “couldn’t grasp what was required” and “was uncomfortable with the task at hand” were common. With respect to research supervision, 66.7% responded positively for both “research supervision opportunities” and “availability of research supervision”. With respect to the skills necessary for research and the satisfaction level of method supervision, “SPSS operating method” was the highest, at 74.5%. The research supervision satisfaction level seen at each research stage was high, at roughly 75 to 76%. However, with respect to the level of comprehension of the students themselves during the research process, “SPSS operating method” was the lowest, at 52.9%, in contrast with about 75% for “bibliographic retrieval” and “Power Point creation”. Going forward, it will therefore be necessary to approach research supervision by introducing SPSS into research at an early stage, while also placing emphasis on research objectives and research background materials.

Key words: public health nursing students, public health nursing research, research supervision, SPSS operation